様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１５日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７３０４０３
研究課題名（和文）　先住民族の視点から見たオーストラリア多文化主義：社会学的実証研究と理論的再検討
研究課題名（英文）　Australian multiculturalism from the point of view of indigenous peoples: sociological empirical researches and the theoretical reflection
研究代表者
塩原　良和（SHIOBARA　YOSHIKAZU）
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：80411693

研究成果の概要（和文）：
本研究では、これまで主に「移民」に焦点を当てて研究されてきたオーストラリア多文化主義を「先住民族」という観点から再考した。具体的には、先住民族の存在や主張をオーストラリア多文化主義の理論・実践のなかでどのように位置づけることができるのかを社会学的実証調査および他国の事例との比較分析によって明らかにし、先住民族の存在や主張にじゅうぶんに配慮した多文化主義のあり方を理論的に検討した。それによりオーストラリア多文化主義研究の理論的・実証的水準を向上させるとともに、日本における「多文化共生」のあり方を考察する際の示唆を得ることもめざした。

研究成果の概要（英文）：
In this study I examined Australian multiculturalism from the point of view of indigenous peoples, while multiculturalism studies in Australia have only focused on immigration issues. Throughout the researches I suggested theoretical and practical implications of the existence and arguments of indigenous peoples in the theory and practices of multiculturalism in Australia, and I proposed the idea of multiculturalism theory which fully considers the existence and arguments of indigenous peoples. In addition, I tried to carry out comparative researches between Australian multiculturalism and “Tabunka Kyosei” in Japan based on the result of this study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：多文化主義、先住民族、オーストラリア、社会学、共生

１．研究開始当初の背景

グローバル化と総称される現代社会の変動を背景に、多くの先進諸国で多民族・多文化社会化がますます進行し、その結果「多文化主義」の理論・実践・政策をめぐる議論が活発に行われるようになった。ただし従来の研究は多文化主義をナイーブに礼賛すべき理想と捉えているとは限らず、むしろ多文化主

義が民族・文化的な差異を固定化し絶対化することで、国民社会を「分裂」させる危険性が議論の焦点となってきた。それに対して、オーストラリアのように多文化主義が国家理念・政策として展開されてきた国の事例研究は、多文化主義に対してもうひとつの批判を提起している。それは、国家政策・公定言説としての多文化主義による多様性の礼賛は表面的なものに過ぎず、むしろエスニック・マイノリティの置かれた不平等な社会的・文化的立場を隠蔽する機能を果たしているという批判である。

以上のような批判的視点に基づき、応募者は 2009 年度までオーストラリア多文化主義の言説・政策の社会学的分析と在豪移民コミュニティの実証的調査を進めてきた。博士論文をもとに 2005 年に刊行された単著では、オーストラリアの公定多文化主義が新自由主義の言説の影響を受けて「ネオリベラル化」した結果、エスニック・コミュニティの集団的アイデンティティを否定し、移民向け社会福祉政策の削減を正当化していくプロセスを言説分析によって明らかにした。また 2007～2009 年度にかけて実施した科学研究費補助金（若手研究 B）による調査では、アジア系移民コミュニティ組織と移民支援組織へのインタビュー・フィールドワークを行った。そしてオーストラリアの多文化主義政策が新自由主義的「改革」の影響を受けた結果、エスニック・マイノリティを国民社会へと「統合」し「管理」することで「望ましい」移民を「選別」し、「不要」とみなされた移民を「排除」する論理へと転化してきたことを明らかにした。さらにこうした問題性を乗り越え、マイノリティの国民社会への「参加」と、異なった様々な人々どうしの「対話」や「協働」を促す論理として多文化主義概念を再定義する必要性と可能性を模索してきた。上述のような研究を進めていくにつれて、先住民族（アボリジニ・トーレス海峡諸島民）の存在や主張を、オーストラリア多文化主義の理論・政策・実践においてどのように位置づけるべきかという論点について、十分な実証的調査と理論的検討を行う必要性が改めて浮き彫りになった。

２．研究の目的

オーストラリアの多文化主義はもっぱら移民の増加に対する対応として、それゆえ先住民族問題とは別の文脈で議論・実践されてきた。しかし、オーストラリア公定多文化主義がもつ「管理」「選別／排除」の言説という問題性の解決に理論的・実践的に取り組み、多文化主義をマイノリティを含めた異なる人々のあいだの「対話」と「協働」を促す論理として再定義していくためには、移民だけではなく先住民族の存在と声も多文化主義理念のなかに適切に位置づけていかなければならない。祖先の土地の植民地化のうえに成立した移民国家オーストラリアにおいて、自分たちの尊厳と権利は未だ十分に補償・回復されていない、という先住民族運動の主張は、征服者の子孫としてのマジョリティ国民が唱える「多文化主義」の偽善性に異議を申し立てる。そうした異議申し立てを受け止めつつ、先住民族の存在や主張を多文化主義の理念のなかに位置づけていくことで、「管理」「選別／排除」の論理をともなわない多文化主義のあり方を模索する可能が開けてくる。先住民族という観点から多文化主義を再考することは、「対話」と「協働」の論理として多文化主義を再構築するためには避けて通ることのできない理論的課題である。

以上のような経緯とこれまでの研究成果を踏まえ、本研究ではオーストラリア多文化主義における先住民族の位置づけを実証的調査から明らかにし、移民と先住民族双方の存在や声に十分に配慮した多文化主義理論のあり方を模索していくことを試みた。

３．研究の方法

平成 22 年度には以下のような方法で研究を実施した。まず 4 月から 7 月にかけて、上記研究テーマに関する先行業績の検討と分析枠組みの策定を行った。そして 8 月にオーストラリアにて現地調査を実施した。まずシドニーで現地在住研究者等との意見交換を行い、その後バサーストで先住民族が多数在籍する公立高校２か所を訪問しインタビュー調査を行った。キャンベラの国立図書館で資料収集を行い、ダーウィンにおいては州立図書館や博物館等で資料収集を行ったほか、現地における先住民族芸術の状況を視察した。その後 9 月から 2 月にかけて調査によって得られた資料やデータを分析した。3 月に 2 回目のオーストラリア現地調査を行った。シドニーで資料収集および現地在住研究者等との意見交換を行い、アリススプリングスでは現地視察と公立図書館等での資料収集を行った。キャンベラでは現地研究者との意見交換および国立図書館・国立博物館等での資料収集を行った。

平成 23 年度においては、前年度に収集したデータの整理・分析を進めて研究の理論枠組みの構築を目指すとともに、それをより確固たるものにするべく 2 回の現地調査を実施した。8 月の調査では、先住民族のルーツをもつ法律学者であるラリッサ・ベーレント博士、先住民族政策の第一人者であるジョン・アルトマン博士、北部準州で先住民族に対するソーシャルワークに従事する林靖典氏とエマ・マーフィー氏などに聞き取りを行った。また 3 月の調査では林氏にフォローアップの

聞き取りを行ったほか、環境問題の観点から先住民族への支援を行っているジャスティン・タフィー氏への聞き取りを行った。また両方の調査を通じて、オーストラリア国立図書館や北部準州立図書館などで資料収集を行い、成果を得た。また日本の先住民族運動に関する調査も行い、アイヌ民族と沖縄の2名の活動家に聞き取りを行ったほか、先住民族支援国連ＮＧＯ「市民外交センター」のメンバーとの意見交換を行った。

平成24年度は、これまでの研究成果を再検討し、先住民族の視点に配慮した多文化主義の理論構築を試みた。まず、昨年度までに収集した資料・データの分析を行うとともに、日本とオーストラリアの先住民族問題の比較のために、日本のアイヌ民族や琉球・沖縄の先住民族運動指導者3名への聞き取り調査を実施した。そして8月にはオーストラリアのパースとシドニー、キャンベラ、メルボルンにおいて、移民・先住民族支援の当事者への聞き取りおよび文書資料収集を実施した。

４．研究成果

オーストラリア多文化主義における先住民族の理論的位置づけについて扱った先行研究はほとんどなく、試論的な業績が散見される程度であった。本研究では 2000 年代後半以降のオーストラリアの先住民族政策の事例研究として、この論点について単なる視点の提示にとどまらない実証的な調査を行うことができた。その結果、2000年代に入って公定多文化主義言説のなかに先住民族という視点が組み込まれていくと同時に、先住民族政策にナショナリズムと新自由主義の論理が大きな影響を与えてきたことが明らかになった。そして、こうした先住民族政策の変化が多文化主義政策のみならず、オーストラリアの社会政策全般に大きな影響を与えていることが示唆された。さらにこうした変化は、新自由主義的な統治の技法による人々の時間／空間的管理の強化という視点から理論的に整理できることが示された。このように本研究の成果は、オーストラリア多文化主義の社会学的研究およびオーストラリア福祉国家研究に、理論・実証の両面から大きく貢献したと評価できる。いっぽうオーストラリアの先住民族政策および多文化主義政策と、日本におけるアイヌ民族・琉球民族をめぐる状況および多文化共生施策との比較研究も行い、いくつかの論稿・報告の形で問題提起することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①塩原良和「『明石純一編著『移住労働と世界的経済危機』明石書店、2011 年」（書評）『移民政策研究』（査読無）第4号、2012年、182-184頁

②塩原良和「多文化共生の限界を超えて」『神奈川の人権教育　神奈川人権協紀要』（査読無）第5集、2012年、70-86頁

③塩原良和「シニシズムを抱きとめて」（書評リプライ）『三田社会学』（査読無）第 16 号、2011年、147-150頁
http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?file_id=68025

④塩原良和「シンポジウム報告『オーストラリアにおけるリテラシー教育とその日本社会への示唆』」『オーストラリア研究』（査読無）第24号、2011年、13-14頁
http://ci.nii.ac.jp/els/110009553497.pdf?id=ART0009997857&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1370448334&cp=

⑤塩原良和・原千代子「外国人住民支援現場と大学教育の『協働』の可能性――川崎市ふれあい館を事例に」（査読有）『PRIME』第 33 号、2011年、47-62頁
http://repository.meijigakuin.ac.jp/dspace/bitstream/10723/1028/1/prime33_47-62.pdf

⑥塩原良和「コメント」（特集：グローバリゼーション、移動／定住）『KG/GP社会学批評』（査読無）第4号、2011年1月、83-84頁

⑦塩原良和「多文化主義におけるメディアの公共性」『学術の動向』（査読無）第 16 巻 1 号、2011年、71頁

⑧Shiobara, Yoshikazu, “In Your Face: A Case Study in Post Multicultural Australia (book review),” *Journal of Intercultural Studies,* （査読無）32 (1), 2011, pp. 95-97.

⑨塩原良和「越境的社会関係資本の創出のための外国人住民支援――社会的包摂としての多文化共生に向けた試論」『法学研究』（査読無）第84巻2号、2011年、279-305頁

⑩塩原良和「『国際社会学』の到達点」『三田社会学』（査読無）第15号、2010年、69-70頁
http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?file_id=53886

⑪塩原良和「『国際社会学』を問い直す――

多文化主義研究からの試論」『三田社会学』（査読無）第 15 号、2010 年、71-82 頁 http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?file_id=53888

〔学会発表〕（計 13 件）

①塩原良和「コスモポリタン多文化主義に向けて」科学研究費補助金（基盤研究 C）「多元化するアイデンティティと「多文化社会・日本」の構想」研究会報告、2013 年 1 月 12 日（於：立教大学）

②塩原良和「共に生きる場所を創り出すということ――大学学部教育と外国人住民支援の連携の実践から」多文化メディア市民研究会報告、2012 年 6 月 13 日（於：三田の家）

③塩原良和「北部準州緊急対応政策における言説政治――先住民族の「自己決定」概念をめぐって」オーストラリア学会第 23 回全国研究大会一般個別研究報告、2012 年 6 月 10 日（於：大阪大学）

④Shiobara, Yoshikazu, “Neoliberalism and Multiculturalism: A Cosmopolitan Alternative?,” Keio University Global COE Program, International Symposium on Designing Governance for Civil Society, , February 6, 2012, Keio University, Japan.

⑤塩原良和「ネオリベラリズムと多文化主義――その先にあるものは何か」第 84 回日本社会学会シンポジウム１「ネオリベラリズムとグローバリゼーション――その影響への社会学的接近」、2011 年 9 月 18 日（於：関西大学）

⑥塩原良和「オーストラリアの多文化政策を踏まえて国内の多文化共生に関する助言」第 8 回移住労働者と連帯する全国フォーラム・東海 2011　分科会⑬「自治体と政策」報告、2011 年 6 月 18 日（於：中京大学）

⑦塩原良和「社会変動論的多文化主義理論の再構成－国民統合・新自由主義・高度近代」第３回国際社会学研究会報告、2011 年 4 月 23 日（於：一橋大学）

⑧Shiobara, Yoshikazu,“Multiculturalism in Australia and Tabunka-kyosei in Japan: a comparative analysis,” Keio University Global COE Program, Keio/Otago International Workshop, March 5, 2011, University of Otago, New Zealand.

⑨塩原良和「北海道ニセコ地域におけるオーストラリア人向け観光と多文化共生」オーストラリア学会第 3 回地域研究例会（関東）報告、2010 年 12 月 11 日（於：慶應義塾大学）

⑩塩原良和「多文化社会における『つながり』の重要性と自治体政策の役割」東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター　多言語・多文化社会研究全国フォーラム（第４回）「『多文化共生』を問い直す――差別や排除のない公正な社会をめざして」協働実践研究 A「地域における多文化的な『つながり』の創出と自治体の多文化共生政策――横浜市鶴見区の現状から考える」報告、2010 年 11 月 27 日（於：東京外国語大学）

⑪塩原良和「問題の文化的社会的側面の分析」大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター武者小路科研費研究会ワークショップ「生物多様性と文化の多様性－南からの移住者コミュニティの担う仲介者の役割」報告、2010 年 10 月 19 日（於：名古屋学院大学）

⑫塩原良和「外国につながる子どもへの支援をつうじた多文化共生概念の再検討」第 16 回多文化間精神医学ワークショップ　シンポジウム「多文化の子どもたちへの支援」報告、2010 年 9 月 25 日（於：明治学院大学）

⑬塩原良和「『変革としての多文化主義』という構想」平成 22 年度（春季）慶應法学会大会報告、2010 年 6 月 12 日（於：慶應義塾大学）

〔図書〕（計 18 件）

①鶴見区地域振興課、鶴見区地域振興課、『平成 24 年度　外国籍及び外国につながる児童・生徒に関する調査事業報告書』2013 年、総 81 頁（塩原は全体の監修とⅠ章、Ⅳ章７、Ⅴ章の執筆を担当）

②塩原良和、かながわ国際交流財団、「つながりを創造する外国人住民支援に向けて」かながわ国際交流財団『外国人コミュニティ調査報告書２――ともに社会をつくっていくために』2013 年、84-87 頁

③塩原良和、法政大学出版局、「先住民族の自己決定とグローバリズム――オーストラリアからの示唆」上村英明・木村真希子・塩原良和編著／市民外交センター監修『市民の外交――先住民族と歩んだ 30 年』2013 年、189-201 頁

④上村英明・木村真希子・塩原良和編著／市

民外交センター監修、法政大学出版局、『市民の外交――先住民族と歩んだ 30 年』2013 年、総 222 頁

⑤社会福祉法人青丘社学習サポート事業チーム、社会福祉法人青丘社、『だれもが力いっぱい学べるために――青丘社「学習サポート事業」の現状と課題』2012 年、総 21 頁（塩原は全体の監修と２・６章の執筆を担当）

⑥塩原良和、弘文堂、『共に生きる――多民族・多文化社会における対話』2012 年、総 168 頁

⑦塩原良和、丸善、「多文化主義の展開と動揺」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』2010 年、890-891 頁

⑧塩原良和、かながわ国際交流財団、「コミュニティ関係の再創造に向けて」かながわ国際交流財団『外国人コミュニティ調査報告書――ともに社会をつくっていくために』2012 年、60-63 頁

⑨塩原良和、御茶の水書房、「隠された多文化主義――オーストラリアにおける国民統合の逆説」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』2011 年、20-37 頁

⑩塩原良和、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、「総説　多文化社会における『つながり』の重要性と自治体政策の役割」東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター『地域における越境的な『つながり』の創出に向けて――横浜市鶴見区にみる多文化共生の現状と課題』（シリーズ多言語・多文化協働実践研究 12）、2011 年、11-20 頁 http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/img/pdf/12_shiobara.pdf

⑪塩原良和、かながわ国際交流財団、「多文化ソーシャルワークの目指すもの」『かながわの多文化ソーシャルワークの推進に向けて――多文化ソーシャルワーク検討事業報告書』2011 年、14-16 頁

⑫塩原良和、慶應義塾大学出版会、「素早く動くこと／留まり続けること」熊倉敬聡ほか編著『黒板とワイン――もう一つの学びの場「三田の家」』2010 年、164-165 頁

⑬塩原良和、日本評論社、「オーストラリアの難民申請者政策――溶け合う『国境』と『国内』近藤敦・塩原良和・鈴木江理子編著『非正規滞在者と在留特別許可――移住者たちの過去・現在・未来』2010 年、231-249 頁

⑭近藤敦・塩原良和・鈴木江理子編著、日本評論社、『非正規滞在者と在留特別許可――移住者たちの過去・現在・未来』2010 年、総 312 頁

⑮塩原良和、弘文堂、「『国民』が変わる――ナショナリズムと多文化主義・多文化共生」塩原良和・竹ノ下弘久編著『社会学入門』2010 年、250-263 頁

⑯塩原良和・竹ノ下弘久編著、弘文堂、『社会学入門』2010 年、総 308 頁

⑰塩原良和、法政大学出版局、『変革する多文化主義へ――オーストラリアからの展望』2010 年、総 240 頁

⑱塩原良和、青弓社、「『連帯としての多文化共生』は可能か？」岩渕功一編著『多文化社会の＜文化＞を問う――共生／コミュニティ／メディア』、2010 年、63-85 頁

６．研究組織

(1)研究代表者
塩原　良和（SHIOBARA　YOSHIKAZU）
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：80411693

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし